

新刊紹介

ハインリヒ・ドゥモリン編著、現代の仏教
ヘルデル書店刊。 *Buddhismus der Gegenwart. Herausgegeben von Heinrich Dumoulin.* Herder. Freiburg. 1970. 全二三二頁。26×18.

右の広告を見たのは本年（一九七二）の三月であった。それが入着したのは八月中旬であった。広告で見た時には本書はドゥモリン教授一人の著作かと思われたが、彼を含めて十三人のすぐれた人々の論文を、彼が編集したものである。彼によれば、本書の、終局の目的は、生きて活動している世界的諸宗教の一つたる仏教にとりての現代の課題たる非仏教的諸宗教、特にキリスト教との対話に貢献するにあるが、しかし直接の目的は仏教の近代化の過程の現象を、諸国と諸地方に分けて、叙述するに在る。というのは、われわれの時代の変革は人間生活の総べての領域にわたって、諸宗教もその変革、近代化に努めているから。

さて本書は大きく四部に分たれて、その各部が、言わば、それぞれ、数章より成っている。第一部仏教の基本教説は中村元教授の寄稿であり、(1)基本的立場、(2)人間の現実存在、(3)倫理の諸原理、の三章を持つ。この第一部は編著者によりて明瞭性と簡潔性との傑作と賞讃せられている。第二部はセイロン、南東アジア及びインドにおける上座部仏教を叙述する。その(1)は緒語であって、ドゥモリンの担当。(2)は第二十世紀における上座部仏教であって J. M. Kitagawa と F. Reynolds との担当。(3)は今日のセイロンにおける仏教であって、A. Fernando の担当。(4)はタイ仏教の最近の展開であって、D. K. Swearer の担当。(5)はインドにおける仏教の諸運動であって、A. M. Fiske の担当。第三部は東アジアとチベットにおける大乘仏教を叙述する。(1)の諸語はドゥモリンの担当。(2)のシナ(中国)における仏教は H. Welch の担当。(3)のヴェトナムにおける仏教は H. Béchert と Vu Duy-Tu との担当。(4)の台湾における仏教は Y. Raguin の担当。(5)の現代朝鮮の仏教はドゥモリンの担当。(6)の近代日本の仏教はドゥモリンの担当。これは全六

十五頁にわたる詳細な論述である。(7)の現代チベットの仏教は H. Hoffmann の担当。第四部は西方世界における仏教であって、E. Benz の担当。(1)はアメリカ合衆国における仏教の感化力。(2)は西洋と仏教との出会。(3)はイギリスにおける仏教。(4)はドイツの精神生活におよぼせる仏教の自発的感化力。(5)ドイツにおける仏教の組織的普及。(6)仏教の影響をうけたる精神生活の諸領域。そして本書は最後に文献目録、著者紹介、人名索引と事項索引とをもっている。

編著者のドゥモリン教授は、哲学博士(Dr. phil.)、一九〇五年五月三十一日生、上智大学の宗教学教授、東方諸宗教研究所長。——一九二四年にイエズス会(Societas Jesu)へ入会。一九三五年東京大学にて日本の宗教史及び仏教を研究。日本の文学博士。一九四一年に上智大学の哲学教授。一九五九—六〇年に、また一九六五—六六年に南東アジア、インド、パキスタン及びセイロンを研究旅行する。非キリスト教的諸宗教との対話のためのヴァティカン事務局の通信評議員(consultor correspondens)。——学的専門領域は仏教、日本宗教史、禅仏教。——主なる著書

は、The Development of Chinese Zen after the Sixth Patriarch in the Light of Wu-men-kuan (1953) (無門関の光にて見たる六祖後の中国禅の発展)。Wu-men-kuan. Der Pass ohne Tor (übersetzt und erk-lärt). Serie Monumenta Nipponica Monographs No. 13 (1953) (訳注無門関、モヌメンタ・ニッポニカ双書のうちの研究論文第十三)。Zen Geschichte und Gestalt (1959) (禅、歴史と形態)。A History of Zen Buddhism. (直前の書の英語版)。Östliche Meditation und christliche Mystik (1966) (東方の冥想とキリスト教の神秘説)。Christlicher Dialog mit Asien (1970 アジアとのキリスト教の対話)。

右の如くにこの編集者は篤学鋭利なる研究者であるから、「ヘルダーの世界対話」(Weltgespräch bei Herder)のうちにおさめられている本書は始中終が信頼せられうるものである。本文一九六頁のうち七五頁が編集者の筆になっているのも当然である。これによりても彼の学の広さと深さと熱心さを推定することができる。そして、なかんづく、近代日本の仏教の章の言葉には、特に日本人

は耳をかたむけねばならぬ。この章からも読み取られうる編集者の立場は啓示宗教と自然宗教との対話ということであろう。

本書所収の十三篇の研究論文は、そのいづれをとるも、みな卓越せるものである。本書出版の計画が数ヶ年前のことであったとの事も編集者の苦心を推察せしむるに充分である。彼は本書出版の意味を三点においてみる。一、仏教をわれわれの時代の生きている世界宗教として示すこと。二、近代化の諸努力は現代仏教における普遍的現象である。三、近代化の努力によりて新らしき生命をえたる仏教は世俗化せられた人間世界及び諸の非仏教的世界宗教との対話の準備をととのえている。仏教に課せられている対話は、なかんづく、キリスト教とのそれであると彼は言う。

この編集者の言葉を、おのづから、支持するかと感じられるのはマールブルグ大学教授 エルンスト・ベンツ(Ernst Benz, geb. 17. Nov. 1907)の筆になる第四部の第六章のうち彼の言葉である。第十八世紀の第一啓蒙時代においては非キリスト教的諸宗教の知識

は小数の学者間に限られていたが、われわれが生きている、この、第二啓蒙時代においてはその知識はすべての人間階層へひろがって、非キリスト教的諸宗教との出会と対決とはわれわれの時代の精神生活の一つの構成要素である。そしてその理由は、一、ヒンドゥイスムや仏教の如きアジアの高度宗教が澆涸たる精神生活へめざめ、そしてキリスト教の諸国においても宣教活動をしていること、二、世界の一体化と技術及び経済の全地球への普及の進行のうちにありて、諸宗教そのものが活潑なる相互交換をなすに至ったこと、の二である。そしてこの現象の背後にはヨーロッパ文化の諸限界の反省という深き、精神的出来事がある、とベンツは言うのである。

川田熊太郎